からなっているので、第一文から横断的に順に検討すると効率的です。明らかな誤りは、まず①です。こんなことが許されるのは側近中の側近だけです。君主にこんなに率直にモノがいえるなら、まさに下克上ですよね。田差は、「己が分際を守るべし」と切り出しているのですから、それに自らも従うのは当然で、直言ができないからこそ田差のように「諫言」するわけです。

④は「論客」というのがそもそも事実と異なります。ここまでで明らかに間違いですから、この二つの選択肢の後半は見る必要はありません。時間の無駄です。さらにいえば、①も④もそれ以降には案外正しいことが書いてあるもので、余計な迷い心を起こしかねませんから、ピンポイントで誤りを発見する精度が求められます。

では、第二文に進みます。③の「君主が聞く耳をもたない」とか「ばからしい」とか、そもそも臣下が言うことではないですね。だったら、諫言などしないで、亡命し別の君主を求めればよいのですから。実際は、「聞く耳をもつ」君主だったわけですから事実と明らかに異なります。

次に⑤も同様に、「補佐していくことは容易ではない」「平公の軽々しい性格」と完全に君主を見限る発言です。これもありえないですね。聞く耳をもつ君主と賢臣として描かれる漢文のドラマパターンとキャラクター設定からしてもそもそもナンセンスです。そんなアホ王とフツーの臣下ならわざわざ書き留めて歴史に残す対象にならないはずです。

したがって、一番問題のないようにみえる②が正解となります。②は逆に、第二文で「心配しないわけには行かない」と君主と国の行く末を案じており、まさに賢臣というべきです。

このように、センター試験の漢文の問題は大抵は、**二ポイントのチェックで正解にたどりつくようにできている**ものです。右で検討したポイント以外をチェックする時間の無駄といえます。むしろ迷いを増幅しかねません。そのツー・ポイントを見抜く力をつけること、そのためにはまず、このようにして文法力の充実をはかると直接に、過去問を解いて慣れ深めていく学習が必須といえるでしょう。

本問については以上です。理系としては漢文にかけられる時間は少ないのが相場ですから、問題演習をするなら、このように一を解いて十を学ぶという姿勢で、質の高い・中身の濃い学びをして、次に応用できるカタチで学ぶことが肝要です。

次回は、センター試験後ですから、二次試験で唯一、理系に漢文を課す東大の過去問を取り上げ、同様な文法解析による読解とともに、記述式問題への対応を指導する予定です。

《了》

《筆者紹介》市川久善（いちかわ　ひさよし）
大学進学教育GHS講師。鎌倉市生まれ・東京大卒。十年程前に住み慣れた東京を離れ、山峰に抱かれた信州の地に拠点を移し幅広く活動。高校時分より言語学に興味を抱き、言語と語学に関する著作を渉猟し、以後受験英文法に飽き足らず、ドイツ語文法、現代中文法、古典ギリシア語、古代和文法等を独学。「理系こそ国語力！」をモットーに、和人の教養の源泉としての漢文教育の復権を目指し、斬新かつ独創的な漢文法による講義を行っている。育文社より『思考訓練の場としての漢文解析』（仮題）近刊予定。

医験vol.5.06-漢文_再校.indd 135　12/10/15 11:22

現和訳　…桀は贅沢の限りを尽くして滅び、紂は淫乱の限りを尽くして敗れました。だからこそ、私は身分を越えた豪華な車を見ようとしなかったのです。」

■桀・紂　今も昔も中華人にとっての最低最悪のヒールであることを知らねばなりません。まさに中国史上最低の王たちです。**古代の偉人が無条件で尊敬される社会で二元論思考をすると、その対極として無条件で悪者とされ、二度と名誉など回復しないヒールが存在**することになります。その第一号、二号がこの二人です。この二人の王は、相応しい徳がないのに支配者となったために、自業自得で滅びていったとされます。中華人にとってはまさに恥さらし支配者の頂点であり、完全極悪人です。

　ところが、日本では、そうはなりません。謀反人とされる明智光秀人も地元ではヒーローでありうるし、悪人評価の人物が、いつの間にか復権し銅像がたてられたりすることはあちこちにあります。和人にとって、どんな大悪党・嫌われ者も、あの世にいけば霊となり評価が変わりうるのです。たとえば平将門もかつては「反逆者」ですが神社に祀られ、むしろ尊敬されています。

　これに対して、中華人にはこの手の発想がありません。死んで何千年たっても、数千年前の本当にいたかどうかもわからない伝説的なこの二人を、そろいも揃って、鼻つまみ者扱いするのです。

　ということは、これは田差による〝究極の脅し〟ですね。「諸候の分際で、天子が乗るような車をしたてて見せびらかしているあなたは、この二人のような運命を辿ろうとしていませんか？」というわけです。支配者にとってみれば、この歴史的完全極悪人の二人と同じと思われたら致命的です。まして、万が一、ここで田差を罰したりしたら、それを認めたことになり、他の臣下に「あいつは紂・桀だ」と思われたら最後、一気に人心は離れ、失脚し、反乱になりかねません。……ということは、田差の言を認め、よく諭してくれた、おまえこそ賢臣だ、とほめるしかありません。

　賢臣と言われる人達は、厳格な身分社会のなかで、生き延びる為に、ここまで計算して、予防線をはって、王や帝に諫言するものです。世俗的な言い方をすれば、そんな計算ができる者が「賢臣」となれるのです。逆に、なんの計算もなしで、純な正義感で「あれはやりすぎだ、王は天子ではないのに……。」とポロっと本音を言ってしまうと即、極刑になるやもしれません。

　でもその用意周到な諫言が成功すれば、王に認められ、出世できる。その一か八かの勝負の記録が漢文の柱の一つです。その記録はまた、次の子孫たちの出世マニュアルとなっていくのです。

■是以　頻出重要構文です。**是以**に対して**以是**という逆順で、意味が違う熟語があるのは知っていますね。訓読では、これを、「ここをもって」と「これをもって」と読み分けます。それが昔から受験生の混乱の元であり、実に困ったものです。古和人は、両者の文法的違いが明確に判らなかったのでしょう、しかしそこにあるニュアンスの違いを「これ」と「ここ」に込めたのです。

　しかし、**是**には「ここ」などという場所を示す訳語をあてるのは明らかなマチガイだと思いませんか？これは私自身が高校生の時分からの疑問であり大いなる不満でした。しかし、この違いを満足に説明してくれる解説書にはついぞ出会えませんでした。

　文法的には**是**（シ）は、be動詞であり、あるいは代名詞「これ（this）」です。現和語に訳すなら、代名詞として、ともに「これ」と訳すのが筋というものです。

　以是の方は、前置詞句です。with this, by thisなどに相当します。その意味で「これをもって」という訓読はまったく正しい訳であり、文法・品詞的にもピタリと重なっていますから古和人のお手柄と言えます。

　これに対して**是以**は、第2文型構文です。英語の慣用構文でThis is why S+V「こういうわけでSVだ」に相当する漢熟構文の一つです。**前文を受けて、因果関係を述べるときの決め文句**です。「だからこそ、あの（異常と思われた）言動となったわけです」と種を明かすときに使います。**以**は、**所以**＝理由・ゆえんの略であり英語でもThis is the reason why ....がThis is whyと簡略化されるように、

S　C=[S副　V3記]
是所以　不敢　顧也

　この関係詞**所**が省略されて**是以**となった（漢文では三文字は二文字化するのが通例）と考えることができます。英語と異なり、関係詞の方がなくなってしまったので、**是以**と**以是**という紛らわしいカタチになりましたが、このように文法的に検討すると、前置詞句と関係詞構文という比較にもならない違いがみえてくるのです。

　とはいえ、先ほどのべたように、**是以**は決め文句ですから、文脈上は紛れることはまずないものです。だから、訓読の「ここをもって」と「これをもって」でも解釈には不自由しなかったのですが、そこにこのような文法的解析を添加して、確実な読解力を身につけてほしいものです。

問1（イ）

　右の解説から、迷うまでもなく、かつ、読解するまでもなく④であるとわかります。文法的な理解がすすむほどに素早く解けるようになっていくものです。

❻平公日善　S　C接V4　O　記V3O
乃命左右　日去車

現和訳　平公は「確かにその通りだ」と言って、お付きの者に「車を撤去（解体含む）せよ」と命じたのであった。

■善　That's true!!　に相当する第2文型です。

■命　冒頭文傍線Aの**令と基本的に同じ使役構文**です。お側の者に命令してやらせた点では変わりないですから。ただここに**曰**が入って発言内容である目的語が直接話法となっており、英語のtell …that SV, say to…SV）のような第4文型構文に変換されています。**曰**は節をまとめる働きをしていますから、本稿の漢文法ではこれを「記号詞」という品詞として捉えています。今の話から明らかなように**曰**はなくても可であり、除けばおなじみの第5文型・使役構文になります。

S　V5　O　V3O
平公命左右去車

　しかしやはり、過ちを悟った王のコトバですから、印象的に直接話法の命令文で〆たかったということでしょう。

問6

　最後は、全体の主旨読解問題ですから基本的には現代文の扱いと同様です。すなわち部分的な誤り（誤訳）をみつけて消去していくことになります。その中で、明らかな誤りを含まず、もっとも不適切な部分が少ないものが「正解」となります。

　すべて、独立した比較可能な三つの文章

医験vol.5.06-漢文_再校.indd 136-137　12/10/15 11:22

■**説**…「ヒトに・モノゴトを・説く」のであるから、第4文型動詞です。tellやteachと同様です。英語的語順に直すと、第一文は、

(人)説天子以天下
S V_4 $O_{二}$ $O_{ヲ}$

「天子には天下国家を説く」

となります。この**以**は**目的語を明示する前置詞の用法**ですから、「〜を」と訳しておけば十分です。しかし、ここは自己の正当性をアピールする場面なので、語順変更と対句のダブルの強調がかかります。

漢文読解法則Ⅴ　《強調(きょうちょう)の美学》

極まった状況では、形式主語構文や基本語順変更がある

そこで、関係詞**者**を用いて、「天子に説く者は…」と名詞節化し、「…天下を説く」と結ぶわけです。元の第4文型が見抜けていればこそ、その第3文型への変形構文とわかり、それが「強調」であると分かるのです。ただし、**説**は繰り返しになるので省略されていますから、訳出するには補う必要があります。動詞を補うと、

説天子者 説以天下
S V_3 O

このような文法的把握できないながらも通釈はできた古和人はしかたなく、**以**に「もってス」と動詞を忍び込ませて解釈しました。上に述べたように、**以**は前置詞であり、**目的語であることを明示するだけの役割**ですから、正確な文法的把握ができれば、そこに動詞が省略されているのが見えてきます。

問5　したがって[D]**説諸候者以国**は要するに、**説諸候者説以国**の第3文型であり、元に戻すとS**説諸候以国**の第4文型となりますから、動詞を補う点のみをチェックすれば、①が正解とわかります。後半はその趣旨ですから、全体の読解にかかわりません。以下で検算していきましょう。

■**6連の対句**　ここで6つ連続で対句を仕掛けるしつこさのワケが分かりますか？

漢文読解法則Ⅲ　《均整(バランス)の美学》

書き言葉ゆえに見栄えとしてのバランスに常に気を配る

①対句構造を至る処で使う

まずもって、「偶数」でまとめるのは、**二元論の古中華人の習性**ですが、これで天子から婦人まで**すべての身分を尽くしていることになる**のです。「まだ他にも身分はあるのではないか」と思う人は、ちょっと応用力に欠けています。一行二句とすると、これが三行ありますね。つまり**一、二、そしてすべて**、ですから必要十分なのです。ちなみに、伝統的にはこのような対句の連続体を「**類句**」と呼ぶそうです。あまり良い名前とは思えませんが……。

■**臣聞**とは、その辺のおじさんのコメントとか、町の噂とかではありません。高貴な身分とかインテリの中華人であれば、誰でも常識と化している、儒教的価値観、要するに孔子様・孟子の様以来の教えですが……という前振りなのです。内容的には、要するに「身分ごとに相応しい話のネタがある」ということで、まさに儒教の真骨頂である「**分相応**」です。これは後に朱子学に結晶化し、江戸時代の官学として身分制社会を支える倫理となっていきます。漢文を読解するということの背景には、このような儒教的価値観から放たれるコトバを儒教的（ときには仏教的）的背景から理解するということが当然に含まれます。

この文章自体は、前漢時代のものですが、そこから約千年後の朱子学へと結晶する要素がそもそもあったのだとわかります。

したがって、この田差の発言は、儒教的な超常識を持ち出してきたにすぎません。古中華人ならば誰でもが認めることであり、誰も反論できない内容です。

すなわち、**どんな身分の高い相手に対しても、この手をつかえば、堂々と意見できる**ことになります。儒教で大切にされる徳目は「孝」であり、親兄弟を大切にすることです。それは祖先崇拝へとつながり、古聖人への畏敬となります。その思想的呪縛のもとでは、古聖人たちの思想はゼッタイに否定できないのです。**どんな身分が高い人であっても、昔々の偉人・聖人（孔子・孟子）には絶対頭が上がらない、その人たちの言った事とされることにはさからえない、それが漢文の精神世界**です。そこで臣下としては、そのような内容まず先に述べて、相手に認めさせるのが最大の自己防御です。

次に、そのロジックに重ねて、現実に起きている失政・失言・誤った事実・矯すべき行為を述べると、それらが聖人の言葉と矛盾していることが明らかになります。

どんな身分の高い者でも、それをうっかり否定しようものなら、自動的に古聖人を否定することになるのですから、古中華人としてはあまりに恐れ多くてできないものなのです。そんなことをすると、「最低の人格者」であり、「人に非ず」とまで言われかねません。だから、認めるしかない。

「ああ、私は聖人の教えに背くところであった」と。そうやって、君主は徳に目覚め、さらに、それを気づかせ、**君主を聖人の道へと軌道修正してくれた賢者・賢臣は、これまた素晴らしい**、ということで出世の道が拓かれます。これが**漢文の典型的な記述パターン**であることをここからも学びとるべきです。

ちなみに、和人はあまりこういうコトはやりませんね。何千年も前の人が述べたことを引っ張りだしてきて、それと違うからあなたはまちがっている、という説得の思考パターンは、現和人には中々理解できないものです。

というのも歴史的にみれば明らかなように、新旧何でも取り入れて、結局、和風に改作していくことが好きで得意なのが和人の習性ですから、仏教も儒教も全部和風に作り替えてしまったし、卑近な例でいえば「■」をもとにしたラーメン文化などは好例でしょう。

和人は、どちらかといえば、昔は昔、今は今と捉えるものです。

確かにかつては朱子学にかぶれ、士農工商からはじまり尊皇思想へと回帰した江戸時代はともかくとして、昭和から平成に生きる現和人は、たとえば「聖徳太子様がこういっているが、あなたのやり方はそれに反する」なんて注意の仕方はしませんね。昔はよかった、昔のことは参考にするが、でも今は今でしょう、と。だから、むしろもっと歴史に学べ、と言わねばならない程です。

まあ、こんな風にセンター試験の漢文の学びを通してであっても、中国人の思考パターンを知り、国際協調・異文化理解へとつなげていくことが可能だし、同時に和人としての己を理解することにつながるようでありたいものです。

だからこそ中華人にとって、60年前の昔のことは誤差範囲であり、水に流すべき過去ではなく、現在とつながっているのだ、と発想するのだ……と理解してあげることも可能になるでしょう。

❺**桀以奢亡　紂以淫敗**
S副句 V_1　S副句 V_1

是所以　不敢　顧也
SC＝[S副　V_3記]

医験vol.5.06-漢文_再校.indd 138-139　12/10/15 11:22

ます。英単語では、glance やlook at など「見る」■の訳語を当てられますが、notice「気付く」⑤は明らかに違いますね。まして、③は問題外です。「一顧だにせず」という言い方も、この意味です。要するに「まったく見向きもしない」ということです。すると①②④が残ります。

次に否定副詞**不**と頻度の副詞**一**＝onceのコンビです。「副詞とは何か」を端的に言えば「名詞以外を修飾する」ということです。ここでは、副詞**不**が副詞**一**にかかっています。上にある方が下の意味をアシストします。よって「一度も…しない」＝never,not at allという意味の全否定になるわけです。逆に**一不**なら、「…しないのが一度はあった」という部分否定となります。この辺りは英文法とは異なり、わずかな順序だけで意味が変わりますから漢文法の特殊性としてシッカリと学ぶべきところです。

この観点からみると、全否定になっているのは、③④⑤ですね。すると併せ技で、答えは④となります。

問4

さて、早速登場しましたね。漢文にお決まりの、臣下である**田差**の「異常言動」です。前問の『随兇』では、王様の狩猟の獲物を横取りするという〝暴挙〟が、実は王の命を救うために自分の命を犠牲にするという美談であることが、弟のアピールによって明らかになりました。

今度は、君主の得意満面のディスプレイ企画を完全無視という無礼です。下手をするとそれだけでも極刑になりかねません。前回までの学びと重ねて、読み解くべき文章展開パターンは、

愚かな王の振る舞い↓賢臣の諫言（目上の人に向かって欠点や過失などをいさめること。）**→王が過ちを悟り改める↓賢臣が出世する↓ともに人徳のある人物として評価される**　という漢文の世界で確立された典型的なストーリーを見抜くことが肝要です。身分的には平公＞田差ですが、最初は儒教的・人徳ランクは逆です。しかし、君主が諫言を受けて過ちを悟り、人徳ランクアップを果たし、臣下は賢臣となりめでたしめでたしです。すなわち身分制社会の栄身出世マニュアルとして記録されることになります。

このような漢文の一般的観点から選択肢を眺めれば、選択肢の色分けは一目瞭然ですね。この時点では、平公は、愚臣である田差に対して、完全に上から目線で怒っているのです。だから、①「失望」どころではありません。③「緊張感のなさ」に対して怒るのではありません。無礼千万だからです。②「臣下の感性と一致しない」なんて問題になりません。身分制社会では、「王様のご趣味はホントにすばらしい」と言うものだからです。⑤目の前の無礼に怒っているのであり「魅力ある国家経営」までの視点があるはずがありません。したがって④が正解。

❸ **爾 三過而 不一顧 何為也**
S 副 V_1接 否副 副 V_3 疑副 記 ア

現和訳　「コラァ田差！おまえは、何度ワシの車の前を通り過ぎても、完全無視しておるが、いったいどういう了見じゃぁ!?」

■**爾**…音でいうと、漢音では「ジ」、その後の呉音では「ニ」です。**爾**と書かれるとちょっと画数が多くてビビりますが、現代中国語の略字で書けば、ニーハオでおなじみ二人称の「你」（＝you）の右辺です。さすがに中華人もこんなに画数を書くのは大変なのでしょう、段々と省略を重ねて今日の姿に至っています。

■**何為**…音読みがわかりますか？**何以**と同じ「カイ」です。**為**と**以**は前置詞であり、そのまま「何のために」「何をもって」と読めば意味が通ります。これは前置詞句であり、副詞句です。（詳細は前掲書・第3章「疑問副詞への疑問とその解明」参照）

にもかからず、訓読では「なんすレゾ」というフシギな読みをしています。明らかに文法的誤訳なのですが、それを捨て切れないのは「伝統」のもつ悪い面です。ここでの**為**は前置詞なのに、動詞として「ナす・スる」の路線で読んでしまったものです。

漢文における**副詞の位置**の基本から考えてみましょう。それは、要するに「日本語と同じ」であり動詞の前です。これが原則ですが、位置の変更が可能です。普通の位置にしてみましょう。

爾 三過而 何為 不一顧

変更可能位置は「文末」ですが、そうすると強調となります。ちなみに、英語と異なり、**「疑問語は必ず文頭に置くべし」というルールはありません。**

たしかに、「どうして完全無視なのか？」とするより、「完全無視するたぁ、どうしてだぁ！」とした方が、疑問の気持ちは強く表れますよね。

しかも、ここで忘れてならないのは、記号詞**也**です。文末に疑問語をもってくれば、これだけで文末を示す記号詞を兼ねるのに、わざわざ記号詞を添えるのですから「!?」くらいの記号はつけてあげたいところです。この訓読では「や」という和古文の疑問助詞をあてていますね。これは文法的には間違いです。**也**そのものに疑問の意味はありません。疑問の意は、疑問語が担っています。和古文ではたまたま文末に疑問助詞をもってくることから、形式的に対応させたにすぎません。

さらに、少しばかり小言を言い添えておくと、訓読では、「…しないのは、なんすレゾや」と、前半が節主語のように古和訳されていますが、「意味が通じればよい」といういわば〝結果主義〟の訓読法と、漢文法による文法解析との根本的な立場の違いがここにあります。……それにしても、「なんすレゾや」とは、ホントにしまりのない訳語に思えますが……。

問1（ア）

右の解説から明らかなように、For what＝Why? ということなので①です。選択肢をみて考えるのではなく、**文法的に解析した結果としての自分の訳語がこの中にあるかを探す**のです。まして、訓読の「なんすれぞ」という誤訳・迷訳をみてその意味を考えるなどは笑止であり、常に漢文法の視点から**何為**を捉えるべきです。これも10秒以内で速攻マークして終わりです。

❹ **田差対曰　臣聞**
S V_3記 O＝[S V_3
S＝[V_4 O関(V_3) O
説天子者　以天下
D
説諸侯者以国
説大夫者以官
説士者以事
説農夫者以食
説婦姑者以織

現和訳　田差は答えた。「私は次のような先哲の言葉があると聞いております。天子に説く時は天下国家を説くもの、諸侯には国を語ればよい、…略…農民には食物、婦女子には織物の話をするものでございます

医験vol.5.06-漢文_再校.indd 140-141　12/10/15 11:22

【文法解析と設問解説】2000年出題

❶車成　$S\ V_1\ (S)\ V_5\ (O)C\ V_3\ O_{副前句}$
題金千鎰　立之於殿下
令　V_5「S_A　V_3助記」
群臣得見焉

現和訳　車が完成した。平公は「これは金貨千枚に値する！」と評し、宮殿の下にディスプレイし、その他多くの臣下たちも見ることができるようにしてやったのである。

■**題**＝「評価する」…ふつうに「題す」といえば、詩や文章などにタイトルつけることですが、これが物品ならば、その値札をつける、つまり「評価する」という意味になります。**車成**は単純な第1文型ですが、続く**題金千鎰**は「何を・どのように・評価するか」という構文となるはずです。これは典型的なSVOCの第5文型となることを読み抜く文法力が必要です。

題の主語は君主である**平公**ですが、主人公かつ君主であるゆえ省略されています。というのは、臣下に命令できるのは君主一人しかいませんから表現する必要がないのです。このような主語の省略のやり方は、形式を重視する英語では認められません。とにかく主語を立てないと始まらないのが英語です（それでも、目の前の相手にいうときの命令文はさすがに主語youを省略しますが……）。判り切った主語は省略可という点は、むしろ日本語っぽい感じさえしますね。

漢文読解法則Ⅰ　《省略（シンプル）の美学》

省略は可能な限り実行される

①主語は前文と同じ限り省略する

これが基本中の基本ですが、右のような省略も可能な限り行なわれるという法則性を捉えることが大切です。

■**於殿下**＝君主は、側近・重臣とともに宮殿の上にいるもの、という常識があれば、殿下とは、必ずしも偉くない臣下達（群臣）の近寄れる場所である。そこにわざわざディスプレイした、見せびらかした、というイメージをもって読みたいものです。だからこそ、次の文で**得見**と、「可能」の助動詞が添加されているわけです。要するに、普通はよほどのことでない限り拝めない車が、展示ショー状態にあり、「下級臣下たちにも、この際ドーンとみせてやれ」というわけです。

■**令**　V_5動詞だという点がポイントです。**使役は動詞で表現するというのが、英語・漢語の文法的共通性**です。これに対して、和語では、使役はもっぱら助動詞で表現するという違いがあります。

主人公の平公は、「諸侯の一人」です。つまり、帝ではないが、領地をもち、臣下を抱え、あわよくば天下取りをねらう存在諸王（中華帝国では、王は帝の臣下である）の一人です。春秋時代ですから戦国の混乱期です。奢侈な車を設えるあたり、倭国（和国）で言えば、伊達者か傾奇者（カブキモノ）かというところでしょうか。したがって、君主である**平公の発言は、すべてが直接、臣下への命令となります**。だからわざわざ「命令した」「…させた」などと訳さねばならないわけではないというのも訳出のテクニックの一つです。たとえば、君主が「よし、●●しようか！」と言った場合でも結果的には命令と同じです。「この車は、臣下の全員にみてほしいものだのぅ」と希望を語っても、準備するのは回りの者ですから、実質的に命令となります。それが漢文の書かれた身分制社会の文法というものであることを併せて読み取ってほしいところです。

問2

古和人（いにしえわじん）の作った返り点や送りがながどう付こうと、直読直解に際しては関係ないのですが、意味からは、選択肢が③と⑥までしか絞れません。可能を表す**得**の意味があるのはこの2つだけ。実に困ったモノです。しかし要するに、「日本語に置き換えるときどういう順序で訳すか」ということだと捉えれば、英語の第5文型の訳し方と同様に、次の順番がわかればよいのだとわかります。

1 5 2 4 3
S 令 群臣 得見 焉 。

あとは、この順番で返り点がついているものを選べばよいですね。これが**漢文法力的実力がある者の答え方**です。**焉**はすでに学んだように〝記号詞〟です。この一連の状況を述べた連文の区切りとして、次に場面が転換するマークとして機能しており、さらに文法的には、**令**の目的節の範囲を指定する役割も担っています。そこで、右の順になっているのは③、④ですから、合わせ技で③が正解となります。

ちなみに、文法的にいえば、⑤、⑥の返り点はは文法的にはマチガイではありません。ただ、この設問には、「書き下し文」が指定してあるから、それに相当する訓読の③が正解になるにすぎません。「書き下し文」を無視し、⑤、⑥のように捉えたとしても読解は可能です。

❷$_B$田差三過而　不一顧
$S_{副}\ V_{1接}\ 否_{副}\ 副\ V_3\ (O)$
$_C$平公作色　大怒　問田差
$S\ V_3\ O_{副}\ V_1\ V_3\ O$

現和訳　ところが、田差は何度車の前を通り過ぎても、完全無視であった。平公はとうとうアタマに来て、田差をつかまえ問いただした。

■**田差**　主役登場です。主語が交替したときは明示するのが原則ですね。そして、後半に**平公**という主語が登場するまでは、主語は**田差**です。これが漢文の主語についての基本原則でしたね。

■**三過**　passed three timesと英訳してはいけません。**三**イコールmany timesです。陰陽二元論的＝二進法思考の中華人にとって、三回以上は、「何度も何度も」という意味になり、一桁繰り上がる感覚であることを知るのが異文化理解というものです。「三度目の正直」「仏の顔も三度まで」という言い回しも、単に3回目を意味しているのではありません。

不一は全否定ですね。これは「一顧だにせず」という和語として摂取されています。このように和訳するということは、その文化の溝をも埋めての意訳にしないと、「直訳という名の誤訳」となるものです。

■**作色**…和古文では「色をなす」と言いますね。頭にきて顔色が変わることです。**作**は、**為**と同様に、文型多義動詞です。「作為」という語は、同義語重ねパターンです。ここの訓読が「なす」と読んでいるのはそのためです。「作る」という意味は、その中の1つにすぎないのですが、現代和語では「作る＝make」どまりであり、漢語摂取から時代が下って用法が大きく縮小した動詞の1つと言えます。

問3

顧の動詞としての意味がわかるか、というポイントと、全否定と部分否定の区別、という二つのポイントで答えがでます。（〝ツーポイント正解法〟と呼ぶ）センター試験の典型的な選択肢の作りです。

顧は「かえりみる」と訓読みすることは大学受験生として知っているべきだと思い

医験vol.5.06-漢文_再校.indd 142-143　12/10/15 11:22

問5　傍線部D「説諸侯者、以国」はどのようなことを述べているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 諸侯に対して意見を述べる者は、その領国をどのように治めるかを問題とする。そのように、話をする相手の本分に応じた話題があるということ。

② 諸侯に対して意見を述べる者は、その領国がよく治まっていることを賞賛する。そのように、話をする相手が喜ぶ話題を選ぶのが重要であるということ。

③ 諸侯に対して意見を述べる者は、その領国全体の利益をよく考えるべきである。そのように、話をする相手の損得だけに左右されてはならないということ。

④ 諸侯に対して意見を述べる者は、その領国に関する事柄をよく知っていなければならない。そのように、話をする相手に合わせた知識が必要であるということ。

⑤ 諸侯に対して意見を述べる者は、その領国の政治以外は詳しく知らないのが普通である。そのように、話をする相手に関係のない事柄については無知でもしかたがないということ。

問6　本文中の田差の発言の主旨をわかりやすく述べた文章として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① そもそも君主の行為に対して率直に意見を述べることが臣下に求められる役目です。とはいえ贅沢が過ぎれば亡国に至る道理を直言することはなかなかできることではありません。平公の分をわきまえない華美な車に気後れして目を伏せるほかなかったのです。

② そもそも諸侯としての領分を越えたふるまいについては臣下として進言しようもありません。とはいえ度を過ごして滅亡に至った古の帝王の例を見るにつけ心配しないわけにはいきません。平公の不吉な将来を暗示する華美な車は見るに忍びなかったのです。

③ そもそも諸侯の身分に限ったことを助言するのが臣下の務めであることは承知しています。とはいえ君主が聞く耳を持たないために国が滅んでも臣下の責任が問われないわけではありません。平公の独裁者ぶりを示す華美な車に敬意を払うことはばからしく思われたのです。

④ そもそも論客の一人として相手に応じた説得の仕方があることは心得てはいるつもりです。とはいえ歴史に名を留める帝王のような強烈な個性を持った人物を諫めるだけの力量はありません。平公の自信を誇示する華美な車に圧倒されて目をそらすよりなかったのです。

⑤ そもそも臣下の一人として君主に忠誠を尽くすべきであるという立場はわきまえているつもりです。とはいえ過去の例に見るように贅沢で国を滅ぼす君主を補佐していくことは容易ではありません。平公の軽々しい性格を象徴する華美な車は見ぬふりをするに越したことはないと思ったのです。

医験vol.5.06-漢文_再校.indd 144-145　12/10/15 11:22

問1　波線部(ア)「何為也」、(イ)「是以」はどういう意味か。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)　何為也
① どうしてか
② 何をしたのか
③ どうしようもない
④ どうしたらよいか
⑤ 何の理由があろうか

(イ)　是以
① 今回だけは
② しかしながら
③ これよりのちは
④ そういうわけで
⑤ この場所においては

問2　傍線部A「令群臣得観焉」は「群臣をして観ることを得しむ」と読む。どのように返り点をつけ、解釈するのがよいか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

① 令群臣得観焉　(平公は)多くの臣下が車を見ることを許した。
② 令群臣得観焉　(平公は)多くの臣下に車を見るように命じた。
③ 令群臣得観焉　(平公は)多くの臣下が車を見られるようにした。
④ 令群臣得観焉　(平公は)多くの臣下が車を見ることを許した。
⑤ 令群臣得観焉　(平公は)多くの臣下に車を見るように命じた。
⑥ 令群臣得観焉　(平公は)多くの臣下が車を見られるようにした。

問3　傍線部B「田差三過而不一顧」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 田差は三度も通りかかったのに、一度しか車の方を振り返らなかった。
② 田差は三度も通りかかったのに、ちらりとしか車を見なかった。
③ 田差は三度も通りかかったのに、一度も平公に対して敬礼しなかった。
④ 田差は三度も通りかかったのに、少しも車に注意を払わなかった。
⑤ 田差は三度も通りかかったのに、車があることに全く気づかなかった。

問4　傍線部C「平公作色大怒」とあるが、平公はなぜ顔色を変えて怒ったのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 豪華な車を作ることによって臣下を楽しませようとする自分の意図を理解しない者がいて、失望したから。
② 車を飾り立てた自分の趣味が臣下の感性と実は一致していないことを知って、裏切られた感じがしたから。
③ そこに車があることさえ気づかないような臣下がいることを知って、あまりの緊張感のなさが気に障ったから。
④ 自らの威信を示すべく作った車が臣下に無視されることは、その威厳が損なわれたも同然であると思ったから。
⑤ 車の美しさすら理解できないような臣下がいるようでは、魅力ある国家経営が難しいと考えたから。

医験vol.5.06-漢文_再校.indd 146-147　12/10/15 11:22

理系のための漢文法精読講義

第5回 センター試験漢文を／に学ぶ

GHS専任講師　市川 久善

本講義の基本スタンス

ここまでの連載に付き合ってきてくれている受験生諸君には、本講義の背景にある「漢文法」のもつ独創性と革新性とが段々に判ってきたことと思いますが、次なる漢文法解析・読解演習に入るまえに、今一度その要点をまとめておきたいと思います。

以下は、『思考訓練の場としての漢文解析』（仮題・育文社近刊予定）の冒頭部分からの引用です。

……

このテキストの四大特徴

一、古文の知識を要求する従来の送りがな・返り点による**訓読法をいったん棚上げ**し、英語の読解でやっているように、**現代日本語による文法的直読・直解**ができるように訓練する。

一、漢文は外国語であるという視点から、**中学から高一程度の英文法**をもとにして説明するので、基礎から応用までの漢文法がムリなく習得できる。

一、最小限の例文の学習を通して、**最大限の漢文読解の法則を導き出す**ことにより、最小限の集中学習の量で、あらゆる漢文に適用できる読解法則を修得することができる。

一、従来の**理屈抜きの「句法・句形」に対しては、明晰な品詞的・文法的解明**により、「習うより慣れろ」式ではなく、**「習ってから慣れよ」**式の最も効率よい勉強の進め方ができる。

……

要点の再確認には、これで十分でしょう。ただし、誤解なきように一点だけ注意しておきます。それはここで「英文法」という中身です。それは学校で通常教えられている従来の英文法そのままということでは決してありません。前掲書が公開されれば明白になりますが、**従来の英文法の在り方をも諸言語との比較によって、言語一般から体系的に捉え返したうえでの新しい「英文法」**でなければならないのです。ここでその英文法を説く余裕はありませんが、その骨子を述べるならば、**欧語の中での英語の特殊性**―端的には、**「簡略化」と「例外の多さ」**です―に惑わされずに文法としての一般性を捉えることなしには、漢文法との比較も単に形式的にしかなしえないということです。

確かに漢文法は英文法と似通っている点が少なくありません。SVで始まる語順などはその最も判りやすい点です。しかし、その把握が単なる形式上の表面的なものにとどまっていると、残りの「英語と違う部分」（これには、日本語に通じる部分と、漢文法に固有のものが混じっている）に筋を通せなくて、結局は、英文法の知識を活かした学びを断念せざるを得なくなるのです。

これまでも英語の文法に準じて漢文法を説こうとした試みがありましたが、学習法として中途半端に終わった根因がここにあります。

今回は、前二回の連載で例示した『随兕』の文法解析をふまえて、新たな視点での学びを累加する形で学んでいきましょう。

出題例2　「奢車」　区別のためにタイトルをつけてある。

春秋時代の諸侯の一人である晉の平公は贅沢に飾りつけた車を作った。車には、天子（天下全体を治める王）の車に用いるような竜を描いた旗が立てられ、犀の角や象牙の飾り、羽毛の立派な覆いなどが施されていた。

車成、題金千鎰、立之於殿下、令群臣得観焉。田差三過而不一顧。平公作色大怒、問田差、「爾三過而不一顧、何為也。」田差対曰、「臣聞、説天子者以天下、説諸侯者以国、説大夫者以官、説士者以事、説農夫者以食、説婦姑者以織。桀以奢亡、紂以淫敗。是以不敢顧也。」平公曰、「善。」乃命左右曰、「去車。」

（劉向『説苑』による）

（注）
1 題金千鎰――車に黄金千鎰の値をつけること。「題」はここでは評価する意。「鎰」は金貨の重さの単位。
2 田差――平公の臣下。
3 臣――平公に対する田差の自称。
4 大夫――諸侯の重臣。
5 官――官僚機構。
6 士――大夫の下の位にある役人。
7 事――職務。
8 婦姑――婦人。
9 桀――夏王朝の最後の王。贅沢を極めた結果、人望を失い、殷の湯王に滅ぼされた。
10 紂――殷王朝の最後の王。みだらな生活を好んだ結果、諸侯が離反し、周の武王に滅ぼされた。

医験vol.5.06-漢文_再校.indd 148-149　12/10/15 11:22